

ライフ  
ストーリー

小林 和香さん

(2008年3月総合政策学部卒業)

あなたがほんの少し、今できることのために

## 1. はじめに

この冊子を手にとってくださりありがとうございます。私は西宮で生まれ育ち、上ヶ原小学校、上ヶ原中学校を卒業しました。また父は関西学院中学部の元教員でもあります。

これから私の人生経験を書いていきますが、ここに書いていることはほんの一部であり、書けないこともたくさんあることをご理解ください。お伝えできる範囲で皆さんに共有できればと思っています。また、今回はセクシュアリティを切り口にしていきますが、私には発達障害(ADHD、自閉スペクトラム症)と複雑性PTSDという側面もあります。どんな人にも多様な側面があり、決して一面では語りきれないことを念頭に読んでいただくと幸いです。

## 2. 「セクシュアルマイノリティ」との出合い

私が自分のセクシュアリティに気づいたのは、大学に入ってからでした。それまで、「同性愛」という言葉や「セクシュアルマイノリティ」という言葉も知りませんでした。

小学校の頃、自分のことを「僕」という女の子がいましたが、私を含め周囲の子たちは「その子はその子」と特に気にすることはありませんでした。小学校時代は、背の高い女の子、優しい男の子、色んな子がいることが当たり前で、「～らしくしなさい」という言葉を聞く機会は少なかつたように思います。

中学校にあがり、制服はきっちり男子、女子に分かれ、授業によっては男女で分けられるものもありました。その中で私はどんどん居心地が悪くなっていきました。「～らしく」しないと周りについていけない。窮屈に感じるが増えました。

高校生になった**2001**年、テレビで“**3年B組金八先生**”を見て、「性同一性障害」という言葉を知りました。当時、私自身も様々な性のグラデーションの中にいるとは理解していませんでしたが、クラスにも性同一性障

害の子がいるかもしれないと悩みました。高校、大学では、より「～らしく」という言葉を聞くようになりました。今思えば、セクシュアルマイノリティのコミュニティに入るまで、自分らしくいられたのは、小学校と、中高の部活で剣道をしていた時だけだったかもしれません。いつもどこかで「～らしく」という言葉がまとわりついてきました。学生時代、「自分らしさとは何か」「女/男らしくしなくていい」「セクシュアリティについて」学ぶ機会は全くありませんでした。

大学3回生の進級論文を書くとき、ずっと気になっていた「性同一性障害」をテーマにしました。調べるほどに、自分が今までいかに「女/男」というカテゴリーに縛られて生きてきたか、人をステレオタイプで見っていたか思い知りました。そして卒業論文では「多様な性から学ぶこと」というタイトルで、様々なセクシュアリティの人たちにインタビュー調査を行いました。大学の中には「ホモは気持ち悪い」という会話や、女装をして笑いを取るなどが日常的にありました。当時自分は当事者じゃないと思っても、研究発表時には足が震えました。卒業論文を書くために参加した講演会で出会ったレズビアンカップルが主催しているサークルに出入りするようになり、卒業後はそのサークルの運営に関わるようになりました。色んな人に出会ううちに、「自分は男性が好きだと思っていたが、その人の体が女性だったら？」「自分は化粧をしなければならないと思っていたが、なぜなのだろう？」「女性に告白されたら性別を理由に断るのだろうか？」と、自分を縛っていた固定概念が崩れていきました。それでも、私はバイセクシュアルだと思っただけでいいと思っています。コミュニティの中には、「バイセクシュアルはどうせ異性とくっつく」「あなたはストレートだからセクシュアルマイノリティじゃない」「ヘテロセクシュアルにはどうせ私たちの気持ちはわからない」。そんな会話がありました。自分の中にある気持ちに折り合いをつけられないまま、とあるイベントで同じ感覚を持つ関学の後輩に出会いました。その人が6年半共に歩んだ元パートナー（2012年度総合政策学部卒業）です。「自分は男でも女でもないと思っている」「好きになった人が好き」と笑顔で話すのを聞いて、やっと自分の中の答えを見つけたように思いました。当時は髪をくくって

化粧をし、ヒールを履いて過ごしていましたが、元パートナーに出会ったことで私の人生は一変しました。今思えば、「～らしさ」から解放され、人生の再スタートを切った瞬間だったように思います。

### 3. 母校を変えたかった

私は在学中、**Habitat For Humanity** の日本学生支部である **Eco-Habitat** 関西学院と 関学よさこい連炎流に所属し、どちらも幹部やリーダーなどを務め、4年間精力的にサークル活動に打ち込んできました。フィリピン、韓国へ行き、幸せとは、ボランティアとは何かを問い続けました。フィリピンに行きサブリーダーを務めた時は、誰一人欠けずに充実した時間を過ごせるように試行錯誤しました。三田キャンパスから広島平和記念公園まで **340km** サイクリングした時は、韓国の仲間と共に走りきりました。関学よさこい連炎流は私たちが1回生の時設立したため、毎年倍になっていくチームをまとめること、自分たちだけではなく、見てくれるお客様が笑顔になってくれるように、居心地のよいサークルをめざしました。

けれど、私は遠くばかりを見ていたことに気づいていませんでした。大切な仲間はすぐ隣にいたのに。私は卒業論文を書いている時、アンケートを何百枚も配ったり、積極的に先輩、後輩、友人にセクシュアリティについて話したりしていたのに、カミングアウトされたことがありませんでした。私自身が当事者か当事者でないかということより、カミングアウトされるような人間ではなかったのです。

卒業してから、サークルの先輩にカミングアウトされました。その時、先輩は私のことを当事者だと知らなかったようで、声を震わせながら電話してくれました。そして私が当事者だというとホッとした様子で自分の学生生活のことを語ってくれました。尊敬していた先輩が自死を考えるほど苦しんでいた話を聞いて、私は本当に悔しかった。自分のしてきたことは何だったんだろうと思いました。先輩の気持ちも知らずに、私は女装する友達を見て笑い、男女カップル前提の恋バナで盛り上がり、私は皆がその場を楽しんでいると思い込んでいたのです。

海外ボランティアへ行き、貧困問題に触れ、文化の違いを学ぶ前に、私は仲間の違いを知るべきだったと思います。よさこいを通して人を笑顔にする前に、私は踊り子の中に色んなマイノリティがいることに気づくべきだったと思います。セクシュアリティに限らず、私は何も想定していなかった。日本国籍ではない学生が含まれていることも。身体障害のある学生が自分の運営するサークルに入りづらいことを考えたこともなかった。自分の特権について振り返ることもなかった。常に誰かのためを思っていたし、世界を良くしようと思っていました。だけど、その前に隣にいる仲間のことを全く考えていなかった。私の中の「**think globally, act locally**」はうわべだけだったことに気付きました。私の隣の人のこと、ひいては私自身のことさえ考えていなかったのです。

そのことに気づいてから、私の学生生活の思い出は灰色に変わりました。楽しかった思い出がすべて自責に変わっていきました。私は何も知らずに、大学生活を送ってしまった自責の念から、セクシュアルマイノリティの活動に没頭するようになりました。それは自身のセクシュアリティを自分が受け入れることよりも優先順位が高く、結果的に自分が感じている痛みは後回しになりました。なぜなら、すぐにでも私は母校を変えたかったからです。母校を変えることで、自分が救われたかったのだと思います。

#### 4. 活動の原点

2007年の進級論文がきっかけであるならば、2010年11月が私のセクシュアルマイノリティの活動の原点です。当時現役生だった元パートナーにお願いをし、母校の先生のおつてを辿って、授業の終わり15分に自分の体験談を話す機会をもらいました。そこで友人たちから集めた写真（おもいを書いてもらったメッセージを持ってもらった）を編集し動画にして音楽をつけて流しました。想いばかりが先走って、ずっと泣いていたことを鮮明に覚えています。足が震えて何もできなかったけれど、たくさんの人たちが食い入るように見てくださいました。そこから2017年12月までライフワークとして講演活動を行うようになりました。

2013年、武田丈先生から人権教育研究室主催でセクシュアルマイノリティをテーマに講演会（後の第1回関学レインボーウィーク）をしないかというお声がけをもらいました。「関学の中のセクシュアルマイノリティ」というタイトルで、私と元パートナーの写真展とパネルセッションを行いました。写真展示コーナーには付箋で自由に感想を貼れるようにしました。同年と翌年の2回、三田キャンパスの学園祭で「関学レインボープロジェクト」と題したブースを出展しました。元パートナーの友人の現役生たちの力を借り、関西学院大学の教職員30人ほどからメッセージと写真を集めて展示しました。このメッセージと写真は2014年の関学レインボーウィークでも展示することになりました。

私はその時まで、当事者が顔だしの方が効果があると思っていました。もちろん、当事者が声を上げることが前提として必要だとは思いますが。しかし、私と元パートナーの写真展と教職員の写真付きメッセージでは、反応が大きく違ったと感じました。前者に対しては、「関学に性的マイノリティのカップルがいるということが衝撃だった」「私たちとなんら変りない日常を送っていて安心した」「自分は当事者なので世の中は偏見だらけだと思っていた」「一人じゃないと実感できた」（関西学院大学 人権研究 第20号より要約）というようなものでした。全体的に、驚きや当事者からの共感が多かったように記憶しています。しかし、教職員の写真に対しては「普段は授業や研究をされている先生方もさまざまな考えを持っていることがわかった」「自分の学部の先生のメッセージがあったので真摯に受け止められた」「教職員によるメッセージにより、いつも講義をしてくださる教授も味方なんだと思えた」（関西学院大学 人権研究 第20号より要約）など、共感を示す声が多く上がったのでした。

2014年に開催されることになった講演会などの企画を、第2回関学レインボーウィークと名付けました。連続して開催されているという土台を作った方が、組織のしくみ作りにつながると考えたからです。そこでは当事者だけでなく、アライの立場で関学レインボープロジェクトを支えてくれた学生に登壇をお願いしました。当時感想に書かれていた言葉は、その後の私の活動に大きく影響を与えてくれました。それは「同じ年代の学生

として“知らなかったこと”への差を感じました」(関西学院大学 人権研究 第20号より要約)というものでした。当事者ではないからこそ、動かせるものがあるのだと確信しました。それから様々な人たちの支えと協力がつないできた関学レインボーウィークには、**2017**年ごろまで関わらせていただきました。その中で学んだことは計りしれず、今も自分の生き方に大きな影響を与え続けています。

## 5. 会社でのアウティング

卒業後社会に出て、一般企業で働くことになりましたが、学生時代とは歴然の差でした。新卒で入社した会社は**2011**年の冬で退職。理由は多々ありますが、一番大きいのはアウティング(セクシュアリティを暴露されること)によって突発性難聴になったことです。その時の記憶は曖昧で、帰りの電車で泣いていたことなど断片的な記憶しかありません。しかし、アウティングは私の人生を狂わせるのに十分でした。

私は運用**SE**の部署で、営業、プログラマー、お客様をまとめるプロジェクトリーダーのような仕事をしていました。当時入社**3**年目だった私は、会議室でマネージャー、係長、主任、後輩、合わせて**6**名ほどでミーティングをしていました。日々の生活と仕事について振り返るミーティングだったため、プライベートについても少し触れられるだろうことは理解していました。後輩から順に質問されていき、私の番になった時に、「結婚するのか？」と聞かれました。咄嗟にいい返事が思いつかず「同性のパートナーがいます。結婚できませんが、これからも仕事を辞めるつもりはありませんし、頑張って働きます」というような返事をしました。一瞬で会議室の中が凍りつき、マネージャーの顔が曇りました。「パ、パートナー？」「知ってたか？」と次々と他の社員に聞くマネージャー。その場にいた人の中では後輩にのみカミングアウトしていたので、他の人は知らなかったと答えていました。そして何事もなかったかのように、ミーティングは終わりました。

その日が木曜日でした。金曜日にマネージャー達の飲み会があったよう

で、そこで私のことが話されました。それを知ったのは、日曜日に主任から電話があったからでした。普段から主任は差別的な発言が多く、私がゲイパレードに行ったと話してみた時も、「女同士はいいけど男同士はちょっとな」と言った人でした。休日に珍しいなと思って電話に出ると、主任は普段とは違ってとても怒っていました。「人の人生に関わることをあんな風に笑い事にするなんて許せない」そう主任は言いました。主任は同僚の営業から私のカミングアウトが全マネージャーに笑い事として広まったと聞いたとのことでした。

翌日の月曜日、会社へ行く時にドアが異常に重かったのを覚えています。浅い呼吸をしながらドアを開けると、**100**人以上いるフロアの社員が一斉にこちらを見たように感じました。そして営業の後輩が笑いながらやってきてニヤニヤと全身を見て去っていきました。席に座って、自分のいるフロアだけでなく相当な数の社員に広まったと感じました。

そこから退社するまで、正直、記憶がほとんどありません。冒頭に述べたように、私は自分の部署だけではなく、他部署との連携がとても重要になる部署にいました。営業にも、コールセンターにも、プログラマーにも、すべての社員に知られて、それが笑い事として扱われている。それは言葉に表せないほどの恐怖でした。悲しいことに、親しい同僚に話してみても、話した私が悪いというような反応で、戦ってくれる人は誰一人いませんでした。

退職した私は、完全に人間不信、社会不信に陥っていました。しばらくの間、耳が聞こえにくく、耳鳴りが治らなかったことも、ストレスになりました。退職後は、長期的な仕事を続けることができず、**2**年間**1**日や**4**日などの短期バイト、最長**2**ヶ月のバイトを転々としました。二度と同じ目には遭いたくない。次に同じことをされたらもう生きていけないと思いました。だからできるだけ職場の人とプライベートな話題をしなくてすむような仕事を選びました。再就職前、最後にしていた仕事はコンビニ弁当を作る工場のライン作業でした。目しか見えない作業着を着て、社員以外は帽子の色で呼ばれる、そんな仕事でした。男女に分かれた社会、異性愛が当たり前の社会で生きていくのは絶望的に感じました。

## 6. パートナーの手術

今は元パートナー(以下パートナー)となってしまいましたが、本人にも許可を得てその時のことを記そうと思います。2015年4月下旬。パートナーが突然の腹痛を訴え、卵巣嚢腫(のうしゅ)の手術をすることになりました。ここでもしセクシュアルマイノリティでなかったら、かかりつけの婦人科で病院を紹介してもらい、職場、家族に手術することを伝え、パートナーである私は病院に付き添ったりお見舞いに行ったりしていたでしょう。たった3行で終わる話だったと思います。しかし、パートナーはFtXトランスジェンダーであり、見た目は男性に見られることが多い人でした。そして、父親にはカミングアウトしておらず、他の家族にはパートナーの自認や私の存在は知られていませんでした。パートナーの母親も当初あまりカミングアウトには前向きではなかったようで、詳しい話はありませんでした。パートナーのセクシュアリティゆえに、家族関係はうまくいっているとは言い難い状況でした。

また、日頃からパートナーは戸籍と見た目の性別にギャップがあったため、病院にあまり行きませんでした。そのために、発見が遅れたとも言えると思います。見た目が男性のパートナーは、精神的苦痛から婦人科に行けていませんでしたが、この時は内科から婦人科に行くように言われ、大きな病院で手術、入院することが決まりました。籍を入れておらず、見た目も女性の私は、パートナーに付き添い、まず先生へのカミングアウトに臨みました。幸い先生がトランスジェンダーという言葉を知っていて手術や入院時の希望を伝えることができました。ここで差別的な発言を受けていたら、信頼できない人に手術される不安も大きかったでしょうし、入院期間も不安を感じながら過ごすことになっていたと思います。

私たちは付き合っ<sup>た</sup>て5年経っていましたが、家族にはゆっくり理解をしてもらい、いずれきちんと話したいと思っていました。卵巣嚢腫になったことで、セクシュアリティのカミングアウト、そして同性パートナーの存在を伝えることが一気に押し寄せてきたのです。何度も話し合い、パートナーは入院前夜、父親にあててカミングアウトの手紙を書き、セクシュ

アリティに関する資料をまとめました。

入院前日、パートナーとパートナーの母は病院の休憩室で泣きながら1時間以上話し合っていました。そして、入院当日、パートナーの両親に会い、5分後にはパートナーが手術室に入ってしまったため、4時間を3人で過ごしました。昨日手紙でカミングアウトされた父親と、カミングアウトに反対だった母親。パートナーの前では平穩だったけれど、私と3人になって怒りだしたらどうしよう、出て行けと言われてたらどうしよう、色んなことを聞かれたらどうしよう。パートナーの安否を心配する気持ちと、義両親へのカミングアウトで、心臓が押しつぶされそうでした。私は必死で、しかし落ち着いた感じを装いながら、パートナーがどれほど素敵な人で、両親のことを想っているかという話をしました。幸い、2人は、パートナーを傷つけてきたのではないかと涙を流し、私にも優しく接してくださる素敵なお両親でした。

これだけのことを1ヶ月弱の間に全て乗り越えなければなりませんでした。幸い、病院や家族へのカミングアウトが成功しましたが、そうでなかったらと思うとゾッとします。普段から病院に行けること、パートナーの存在をオープンにできること、家族のサポートを得られること。当たり前のようなのですが、緊急時(病気だけでなく災害時なども)にその有り難みが浮き彫りになると感じました。

## 7. 誰かに助けてほしかった

私の発達特性も要因だと思いますが、私は「自分はおかしくない」と思うことが苦手です。嫌なことをされても、嫌だと言えなかったり、自分がダメだから受け入れてもらえないんだという考え方に偏ったりしがちです。本当は活動よりも先に、自分のことに向き合うべきだったのかもしれませんが。それでも自責の気持ちに報いたい、もう誰も失いたくないという思いが先行していました。セクシュアリティという自分の根底に関わる活動がむしやらふっしょくにすることで、何かを払拭したかったのだと思います。でも本当は大勢の人に向かって傷口をむき出しにして、過去をえぐるような

体験をしなくても、ただ話を聞いてもらいたかったのかもしれませんが。誰かのことを守りたい、その裏側にあったのは、自分のことを助ける術<sup>すべ</sup>を知りたかったということだったのかもしれませんが。

2010年から7年続けた講演活動を今は休止しています。消えたいと願う日々が続き、もうこれ以上無理だと感じたからです。

私が自分のことに気付き始めた2007年。あの頃の私に言ってあげたい。「ゆらいでもいい。変わってもいい。悩んでいい。決めなくていい。あなたはマイノリティでもあるし、マジョリティでもある。誰かの幸せのために、あなたが幸せになっていいんだよ。」

## 8. おわりに

「はじめに」で前述したように、ここに書いたことは私の人生のほんの一部にすぎません。辛<sup>つら</sup>くて思い出というには早すぎる経験や、受け入れがたい過去、そして今でも脳裏に焼き付くような出来事には触れていません。それでも何か残すことができているならば幸いです。

このチャンスをくださった武田先生、澤田先生に深く感謝しています。そして7年間、関学レインボーウィークという灯火<sup>ともしび</sup>を灯し続けてくれているすべての人へ。

いつか誰もが、このキャンパスを堂々と歩き、好きな人と空を眺め、友人とたわいもないランチを不安なく過ごし、誰かの幸せを祈ることができる日が来ますように。